第三章　末摘花の物語　久しぶりの再会の物語

［第一段　花散里訪問途上］

卯月（うづき、陰暦四月）ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて（光君は花散里を思い出し申しなさって）、*忍びて（懐かしんで）対の上に（夫人に）御暇（おんいとま、御断り）聞こえて出でたまふ（申し上げてお出掛けなさいます）。　*妙に分かり難い言葉遣いの文だ。「しのぶ」は「偲ぶ（恋い慕う、懐かしむ）」と「忍ぶ（耐える、隠れる）」が平安以降は混同された、と古語辞典にある。ただ、「しのびて」は＜こっそりと＞という副詞と規定されがちなので「偲びて」とは取り辛いところだが、此処はどうしても「忍びて」では意味が通らない。「対の上」は＜二条院の西の対に住まう紫の上＞に相違ないだろうが、此処でこういう言い方をする意味は私には分からない。「暇」はざっくり言えば＜自由時間＞といったところらしく、単に＜ヒマ＞だったり＜所要時間＞だったり、場合によっては＜休暇＞や＜辞職＞の意味になる。此処では光君が＜ちょっと出かける＞と紫の上に＜外出を告げた＞のが実態だろうから、文体としては＜断って出かけた＞という言い方になると思う。その幾分遠慮がちな、夫人に憚る光君の姿勢が「しのびて」を余計分かり難くする、という悪循環。しかし光君の事情は留守を任せて、それを守り通した夫人に対して、相当な信頼と愛しさを寄せていた事は既述されているので、夫人に対する配慮は当然だ。それでも、此処でこういう語り方をする作者の意図は私には良く分からない。

日ごろ降りつる名残の雨、いますこしそそきて、をかしきほどに、月さし出でたり（数日来降り続けていた終わり掛けの雨が此処で少しざっと来て、止んだ後の初夏の潤んだ陽気に月が出てきました）。

昔の御ありき（若い時分の忍び歩きの頃が）思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほど（道すがら）、よろづのこと思し出でておはするに（車中で様々な事を思い出して御出でになる内に）、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ（すぎたまふ、通り掛りなさいました）。

大きなる*松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、*風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき香りなり（大きな松の木に藤が咲きかかって、月影にひらひらと映えて、風に乗ってさっと匂うのが懐かしく、そこはかと香りが漂う）。　*注に＜松と藤という取り合わせの構図。当時の和歌や源氏物語中に多く見られる。＞とある。＜松に藤＞は初夏の代表的な画題らしい。また参照出典に、「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」（拾遺集夏−八三　源重之）、が挙げられている。＜藤の花はナツにこそ咲き（先に）掛かっていたんだね、マツにばかり蔓を巻き掛けて咲いていると思っていたけど＞という駄洒落らしいが、私のような東京者には＜ナ↑ツ↓＞と＜マ↓ツ↑＞でアクセントが違うので、意味は分かるものの音感上の面白みは感じられない。　*「風につきてさと匂ふ」については、「人もなき宿に匂へる藤の花風にのみこそみだるべらなれ」（貫之集−七一）の歌が参照出典に示されている。「べらなり」は＜〜すべきもののようだ＞とあり、強調の「こそ」を受けた結びの已然形「べらなれ」は＜〜だけが〜できるものなのだろう＞となるのだろう。歌の背景は分からないが、＜愛する人の居ないこの家に匂う藤の花は風が動かすだけなんだな＞と、残り香が切ないみたいな感じだろうか。

橘に変はりてをかしければ(橘の爽やかな香りとは別の優しい香りに誘われて)、さし出でたまへるに(車中から身を乗り出しなさると)、柳もいたうしだりて(柳の枝も伸びてずいぶん垂れ下がって)、築地も障はらねば(土塀も崩れて樹木の発育を妨げないので)、乱れ伏したり(乱雑に伸び放題でした)。

「見し心地する木立かな(見覚えのある木立だな)」と思すは(と光君が御思いに為るのは)、*早う(早い話が)、この宮なりけり(此処が常陸宮邸だったからです)。いとあはれにて(光君は万感胸に迫り)、おし止めさせたまふ(牛車を押し止めさせなさいます)。 *「早う(はやう)」は<早くに、元々>くらいの意味だが、擬口語体で使いやすい語感の所為か、此処にあるように<つまりは、要するに〜だったから>の慣用句で使われる事がある、のだろうと考えた。

例の(例によって)、惟光はかかる御忍びありきに後れねば(おくれねば、取り残されないので=外れることは無いので)、さぶらひけり(御供していました)。召し寄せて(光君は惟光を呼び寄せてこうお尋ねなさる)、「ここは、常陸の宮ぞかしな(常陸宮邸であったよな)」

「しかはべる(然様で御座います)」と聞こゆ(と惟光は申し上げます)。

「ここにありし人は、まだや眺むらむ(此処に居た人は今でも嘆いているだろうか)。訪らふべきを(御見舞いすべきだろうが)、わざとものせむも所狭し(事改めるのも堅苦しい)。かかるついでに(丁度良い機会だから)、入りて消息せよ(いりてせうそこせよ、邸内に入って事情を探れ)。よく尋ね入りてを(よく相手を確かめてから)、うち出でよ(名乗るのだぞ)。人違へしては、*をこならむ(人間違いでは馬鹿らしい)」とのたまふ(と光君は仰います)。 *姫宮はどこまで行っても「をこならむ」人らしい。それが自分の一面かと思えば笑える、いや笑えない。

ここには(宮姫に於かれては)、いとど眺めまさるころにて(ますます嘆きが深まる頃であって)、つくづくとおはしけるに(ただただ茫然となさって居らしたが)、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めて、いと名残悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方(雨漏りで濡れた廂の隅の辺りを)おし拭はせて(おしのごはせて、女房に拭き上げさせて)、此処彼処の御座(ここかしこのおまし、部屋中の敷物の配置を)引きつくろはせなどしつつ(整理整頓などさせ為さりながら)、例ならず世づきたまひて(いつになく世間並みに片付けなさって)、

「亡き人を恋ふる袂のひまなきに、荒れたる軒のしづくさへ添ふ」(和歌 15-3)

「昔を偲ぶ涙雨、濡らす袂に屋根の漏れ」(意訳 15-3)

も(と詠んでも)、心苦しきほどになむありける(笑えない現実でした)。

[第二段　惟光、邸内を探る]

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに(あちこちと人の音がする方はどこかと探したが)、いささかの人気もせず(少しの人影もない)。

「されば こそ(まぁそうだろう)、往き来の道に見入るれど(今までも行き帰りに覗いたことがあるが)、人住みげもなきものを(人が住んで居そうも無かったからなぁ)」と思ひて、帰り参るほどに(戻り掛けると)、

月明くさし出でたるに(つきあかくさしいでたるに、月が明るく照り出したので)、見れば、格子二間ばかり上げて(かうしふたまばかりあげて、蔀格子を二間はね上げて)、簾動くけしきなり(すだれうごくけしきなり、簾に影が動いていました)。

わづかに見つけたる心地(やっと見つけた心持ちで)、恐ろしくさへおぼゆれど(気味悪さも感じたが)、寄りて、声づくれば(声を掛けると)、いともの古りたる声にて(ひどく老いぼれた声で)、まづしはぶきを先にたてて(咳払いを先にしてから)、

「かれは誰れぞ。何人ぞ(そこに居るのはどなたですか)」と問ふ(と住人が問います)。名のりして(そこで、惟光は名乗ってから)、

「侍従の君と聞こえし人に、対面賜はらむ」と言ふ。

「それは、ほかになむものしたまふ(その者は余所へ行ってしまいました)。されど、思し分くまじき(おぼしわくまじき、事情の分かりそうな)女なむはべる(者なら居ります)」と言ふ声(と応える声は)、いたうねび過ぎたれど(相当歳を取っているが)、聞きし老人と聞き知りたり(惟光は聞き覚えのある老女房と気付きました)。

内には(室内に居た女房たちにとっては)、思ひも寄らず(思いがけずに)、狩衣姿なる男(軽装な男が)、忍びやかにもてなし(忍び通いさながらの)、なごやかなれば(柔かい物腰なので)、見ならはずなりにける目にて(もう長いこと見慣れずに居た光景に)、「もし、狐などの変化にや」とおぼゆれど(と思われたが)、近う寄りて(惟光が更に近付いて)、

「たしかになむ、うけたまはらまほしき(お確かめ致したい事が御座います)。変はらぬ御ありさまならば(姫君が以前と変わりなく独り身でおいでならば)、尋ねきこえさせたまふべき御心ざしも(殿は御見舞い申しなさろうという御意向を)、絶えずなむおはしますめるかし(今でもお持ちのようです)。今宵も行き過ぎがてに(今宵も通り掛かりに)、止まらせたまへるを(御立ち止まりになっていますが)、いかが聞こえさせむ(どう御返事申し上げましょうか)。うしろやすくを(ご遠慮なく、御話し下さい)」

と言へば、女どもうち笑ひて、

「変はらせたまふ御ありさまならば(御変わりがある御身の上ならば)、かかる浅茅が原を移ろひたまはでははべりなむや(このような荒れ屋から移りなさらないでは居られましょうや)。ただ推し量りて聞こえさせたまへかし(もう見たままから事の経緯を推量して殿に申し上げて下さいまし)。年経たる人の心にも(私たちのような老女でさえ)、たぐひあらじとのみ(前例を知らないほどの)、めづらかなる世をこそは見たてまつり(有り得ない惨状と拝見致し)過ごしはべれ(過ごしてまいりました)」

と、ややくづし出でて(やや愚痴気味に身を乗り出して)、問はず語りもしつべきが(いくらでも話してきそうなので)、むつかしければ(惟光は面倒に思って)、

「よしよし。まづ、かくなむ、聞こえさせむ(とりあえずその様に申し上げよう)」とて参りぬ(と言って光君の許へ戻りました)。

[第三段　源氏、邸内に入る]

「などかいと久しかりつる(ずいぶん手間取ったな)。いかにぞ(どうだった)。昔のあとも見えぬ(昔通った径跡も見えない)蓬の茂さかな(よもぎのしげさかな、雑草の茂りようだな)」とのたまへば(と光君が仰ると)、

「しかしかなむ(かれこれこうした次第で)、たどり寄りてはべりつる(突き当てまして御座います)。侍従が叔母の少将と言い侍りし老人なむ(いひはべりしおいびとなむ、言い居ります年寄りなるが)、変はらぬ声にてはべりつる(昔と変わらぬ声で語りました)」と(と惟光は)、ありさま聞こゆ(邸内の様子を申し上げます)。いみじうあはれに(すると光君は実に感慨深く)、

「かかるしげき中に(このような放置家屋の中で)、何心地して過ぐしたまふらむ(どういう心持ちで御暮らしだったのだろう)。今まで訪はざりけるよ(とはざりけるよ、手紙も出さなかったからな)」と、わが御心の情けなさも思し知らる(御自分の薄情さも思い知りなさいます)。

「いかがすべき(どうしたものか)。かかる忍びあるきも(今の重職に在ってはこうした忍び通いも)難かるべきを(かたかるべきを、しずらいものだし)、かかるついでならでは(このような序ででもなければ)、え立ち寄らじ(まず立ち寄らない)。変はらぬありさまならば(あのまま独身と言うのも)、げにさこそはあらめと(如何にもそれが相応しいと)、推し量らるる人ざまになむ(想像される姫の人となりだしな)」

とはのたまひながら(とは仰りながら)、ふと入りたまはむこと(すっとおはいりになることは)、なほつつましう思さる(やはり憚られると御思いになります)。

ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど(気の利いた御歌詠みもぜひ差し上げたく思われたが)、見たまひしほどの口遅さも(ご経験された返歌の遅さも)、まだ変らずは(まだ変わっていないとしたら)、御使の立ちわづらはむもいとほしう(御使いが待ち侘びるのも気の毒と)、思しとどめつ(思い止めなされました)。惟光も、

「さらにえ分けさせたまふまじき(それに邸内はとても踏み分けなされませんほど)、蓬の露けさになむはべる(蓬が露に濡れております)。露すこし払はせてなむ、入らせ給ふべき(いらせたまふべき、お入りなさいますよう)」と聞こゆれば(と申し上げれば)、

「尋ねても我こそ訪はめ、道もなく深き蓬のもとの心を」(和歌 15-4)

「知ったからには訪れて、深い心を確かめたい」(意訳 15-4)

*「たづぬ」は＜問う、調べる、訪問する＞だが、「たずねて」には現在進行の＜調べて＞と過去に＜調べてみて、分かって＞が含意される。そこで「も」という係助詞だが、＜類推・列挙・強調・疑問・逆接＞と一筋縄ではいかない。「とふ」は「たずぬ」の別の言い方で、共に折々で内意を替える。「みちもなく」は＜実際に径が無い＞と＜確たる宛ても無く＞。「もと」は＜足許＞と「昔のまま変わらない」。「心」は＜気持ち。気分＞と＜思い、考え＞。という複意語だらけからなるこの歌は、二通りの読み方に大別される。一つは、「尋ねても(調べても)我こそ訪はめ(やはり自分で確かめよう)道もなく(道も見えないほど)深き蓬のもとの(深い雑草に覆われた家に住む人の)心を(気持ちを)」。今ひとつは、「尋ねても(探し当てたからには)我こそ訪はめ(自分こそが訪れよう)道もなく(宛ても無く)深き蓬の(ただ待ち続けた)もとの心を(変わらぬ思いの人を)」。さらに各語別々の数種の組み合わせもありそうだ。その中で、意訳は最も甘い歌を想定した、つもり。

と独りごちて(と贈歌は面倒なので独り言にして)、なほ下りたまへば(そのまま車から御下りになったので)、御先の露を、馬の鞭(むち)して払ひつつ入れたてまつる。

雨そそきも(あまそそきも、雨しぶきも)、なほ秋の時雨めきて(なほあきのしぐれめきて、まだ秋の時雨のように時折強く)うちそそけば(降り掛かったので)、

「御傘さぶらふ(みかささぶらふ、御傘が御座います)。*げに(まことに古歌に詠われている通りに)、木の下露は(このしたつゆは、木陰に滴る露は)、雨にまさりて(雨より濡れまする)」と聞こゆ(と惟光が申します)。　*この古歌の参照は、「みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」(古今集東歌-一〇九一　陸奥歌)と示されている。この引歌にある「宮城野の木の下(みやぎののこのした)」は、＜741年聖武天皇の勅願により全国に建立された国分寺の中でもわがくに最北に位置する＞と仙台市教育委員会が説明する「陸奥国分寺(むつこくぶんじ)」がある宮城県仙台市若林木ノ下(きのした)あたりの事らしい。建立当時は辺り一帯が鬱蒼とした森だったらしく、この「雨除けではなく木陰を行く為に笠を被る」という分かり難い歌の意味が少しは分かる気がする。何しろ仙台と言えば、杜の都というくらいだし。また、この歌をWeb検索すると松尾芭蕉の「奥の細道」関連のサイトが多数ヒットする。木ノ下薬師堂は芭蕉が歌枕の旅の仙台最後の地に訪れた場所として有名らしい。概略は分かったが、それでも「みちのくのうたー読人知らず」では詰め切れないこの歌を、改めて習うと「御侍(側近の御侍様)御笠と申せ(宮様に御笠をと申し上げなさい)宮城野の木の下露は(宮城野の木の下の水っぽさは)雨に増さりて(雨以上ですから)」となるようだ。

御指貫の裾は(おんさしぬきのすそは、邸内に分け入った光君の袴の裾は)、いたう*そほちぬめり(びしょびしょに濡れてしまったようです)。　*「そほつ」は＜濡れる＞とある。また、縁語の「そぶそぶ」は＜ざぶざぶ、じゃぶじゃぶ＞という擬音語ともあるから、「そぼつ」は＜びしゃびしゃになる＞くらいの語感があったかもしれない。まして「いたう」である。

昔だにあるかなきかなりし中門など(昔でさえあるかないかぐらいだった中門などは)、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳(むとく、貧相)なるを、立ちまじり見る人なきぞ(この場に他人が紛れて見ていないことだけが)心やすかりける(光君の心の救いでした)。

［第四段　末摘花と再会］

姫君は、さりともと待ち過ぐしたまへる心もしるく（いつの日にかは殿に御出で頂けると待ち過ごしなさった願いが適って）、うれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて対面せむも（あまりにも貧しい身なりで対面するのも）、いとつつましく思したり（とても決まり悪く御思いになりました）。

大弐の北の方の奉り置きし（たてまつりおきし、下向用に差し上げたままになっていた）御衣どもをも（おんぞどもをも、お召し物類までも）、心ゆかず思されしゆかりに（気が合わないと御思いだった叔母からの贈り物だったので）、見入れたまはざりけるを（見向きもしないで居らしたものを）、この人びとの（此処に居る女房たちが）、香の御唐櫃に（かうのおんからびつに、香り壺と共に収納箱に）入れたりけるが（仕舞って置いた物が）、いとなつかしき香したるを（かしたるを、香りがするのを）たてまつりければ（差し出してきたので）、いかがはせむに（しかたなしに）、着替へたまひて（着替えなさって）、かの煤けたる御几帳引き寄せて御座す（おはす、居間にお座りになります）。

入りたまひて（光君も居間にお入りになって）、

「年ごろの隔てにも（長年と離れていても）、心ばかりは変はらずなむ（心だけは変わらずに）、思ひやりきこえつるを（御思い申してきましたが）、さしも*おどろかいたまはぬ恨めしさに（何ほどとも近況を知らせようとなさらぬ不甲斐なさに）、今まで試み聞こえつるを（こころみきこえつるを、お気持ちを量り兼ね申してきましたが）、　*「おどろかす」は＜ビックリさせる、目覚めさせる、気付かせる＞が主意だろうが、その延長だろうか＜（年月を経て忘れた頃に）手紙を出す、訪問する＞という意味でも使われた言葉らしい。それだけでも此処で「おどろか（い＝そうと）」を使うことの分かり難さはあるが、光君が是を言う正当性が不遇に須磨・明石を流浪した二年間の都落ちにあるという、作者の理屈っぽさには些か閉口する。ずいぶん苦心して＜近況を知らせようと＞と言い換えたが、とても得心は出来ない。「おどろかい」が分かり難いから「恨めしさ」も分かり難い。光君に不満が有るのは分かるが、それが＜憎らしい＞や＜口惜しい＞や＜嘆かわしい＞では短絡に思える。姫からの近況報告がないから、そして元々忘れていたから、取っ掛かりがない、手応えがない、で、＜不甲斐なかった＞のだろう。さらに「試み」が分からない。「こころみ」るとは＜ためしてみる＞ではあろうが、何を如何＜ためす＞のか。そうか、知らせが無いから、何を如何＜考えたものかと＞考えを「試み」たのか。で色々考えた挙句、＜お気持ちを量りかね＞た事にした。ナンダカナ。

*杉ならぬ木立のしるさに（‘杉ではない’‘松’の木立の‘過ぎてはならない’‘待つ’なのだからという分かり易さに）、え過ぎでなむ（とても通り過ぎることが出来ずに）、負けきこえにける（従い申してこうして伺ったのです）」　*この「杉ならぬ」を＜杉に違いない＞という断定強調と読む事は出来ない。いや、文法上で可能かどうかを言っているのでは無い。この宮邸の木立については、光君が此処を通り掛かりに「大きなる松に藤の咲きかかり」たるを見て、「見し心地する木立かな」と言って立ち止まった事が既述されているからである。したがって、「杉ならぬ木立の著さ」は文体上は＜杉ではない木立の分かり易さ＞なのであり、その「しるさ（分かり易さ）」の中身は「杉ならぬ」が＜過ぎならぬ＝通り過ぎてはいけない＞の洒落言葉で、「杉ならぬ木立」は「松」なので＜待つ＞を示している、という言葉遊びで構成されている。そのように茶化さずには居られないこの場のバツの悪さ、こそが作者の意図した描写でしょう。だというのに、この「分かり易さ」を無視して、なぜか「杉

ならぬ」をあっさりと「松」には置き換えずに、「木立の著さ」から逆引きして＜標の杉ではないものの(それなりの木立の著さ)＞と因縁付けて、＜「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今集雑下、九八二、読人しらず）を引く。＞と言う注釈の「分かり難さ」には、頭を抱えた。どう頭を抱えたかと言えば、この引歌を「わがいほは(私の仮住まいは)みわのやまもと(三輪山の麓です)こひしくは(会いたければ)とぶらひきませ(訪ねておいでなさい)すぎたてるかど(杉を目印に立てた門の家に)」と言い換えたのでは、はたと意味不明だからである。何せ「杉」ということなら、屋久島の方が有名なんだし。ともあれ、この引歌は以前も出てきたが、改めてWeb検索してみると、どうやら「三輪山伝説」を下敷きして居るらしいことが分かった。マ、厳密な事は分からないが「題知らず－読み人知らず」のままでは、それこそコジツケででも何か背景を設定しないと何の解釈も出来ない。で、「三輪山伝説」だが、出雲か河内の姫の許に得体の知れない益荒男が通って孕ませた。で、その男の正体を確かめようと付けた糸を辿ったら三輪山に住む大物主でその子孫が天皇となったと言う神話、らしい。マ、記紀、とくに古事記の神話は今で言うイヤラシイ、本来は趣き深い、性器と性交に基く国造りの物語のようなので、そこを心して読めば「我が大矛は三輪大本営(我が珍矛は三輪山麓に在るから)乞ひしくは飛ぶ来ひ着ませ(良い思いをしたいなら直ぐに来て一儀に及ぶ準備をしなさい)過ぎ立てる角(我が珍矛が優れた道具であることは既に使って見せたから威力は知っているだろう)」という大物主の実に色っぽいお誘いの言葉となり、延いては＜諸豪族よ、我がヤマトの三輪陣営に集結せよ＞という天下布武の号令とも読める。このように「過ぎ立てる角」が魅力いっぱいに光り輝き、且つ一方ではその威力の誇示を持って脅迫している、と言う臨場感の結びなるがこの句を際立たせている。だから、是は味わい深い歌と言うよりは、昔の軍神の名文句というべきものかもしれない。と言うわけで、読めば読むほど＜しるしの杉＞は遠ざかり、＜しるしの過ぎ＞が近付いてくるのである。だから為時女は初めから「杉ならぬ」と言っている。

とて(と言って光君が)、*帷子をすこし掻き遣り給へれば(かきやりたまへれば、払い除けなさると)、例の(例によって姫は)、いとつつましげに(とても恥ずかしそうにして)、頓にも応へ聞こへ給はず(とみにもいらへきこえたまはず、直ぐには御返事申し為されません)。　*「帷子(かたびら)」は几帳の暖簾。片端を開いて出入りするから＜かたびら＞という、などとは辞書に書いてないが、そう思えば覚えやすい。

かくばかり分け入りたまへるが浅からぬに(しかし、このように草深い中を分け入り為された光君の浅からぬ御心ざしに)、思ひ起こしてぞ(気を奮い立たせて此処ぞと)、ほのかに聞こえ出でたまひける(小声でご挨拶為さいます)。

「かかる草隠れに(こうした草に覆われた家の中でひっそりと)過ぐしたまひける年月のあはれも(過ごしなさった長年にわたる哀切も)、おろかならず(大変なものでしょうが)、また変はらぬ心ならひに(私は今でも変わらぬ思いで)、人の御心のうちもたどり知らずながら(この御会いしなかった間の貴方のお気持ちが如何なっていたのかを聞き知ることもないままに)、分け入りはべりつる露けさなどを(分け入って草露と涙に濡れておりますのを)、いかが思す(いかが御思いでしょうか)。

年ごろのおこたり(長年のご無沙汰も)、はた(それもまた)、なべての世に(不遇に遭った世情によるものと)思しゆるすらむ(大目に見ていただけるでしょうか)。今よりのちの御心にかなはざらむなむ(今後御心に背くような事があれば)、*言ひしに違ふ罪も負ふべき(嘘を吐いた罰も受けましょう)」　*「言ひしに違ふ(いひしにたがふ)」については、注に＜「いとどこそまさりにまされ忘れじと言ひしに違ふことのつらさは」（奥入所引、出典未詳）を踏まえる。＞とある。出典未詳の文句を文字面で追うのは

頼り無いが、＜本当にますます切なくなるだろう、忘れないと言った事に反する状態になる辛さは＞と言い換えれば惜別の歌になる。とは思うが、「言ひしに違ふ」がそれほど特別な言い回しとも思えない。「言ひしに勝る」とか「言ひしに劣る」もそうだが、「言ひしに違ふ」も今でも使う言い方だ。

など(などと光君は姫に)、さしも思されぬことも(それほど深くは御思いにならないことも)、情け情けしう聞こえなしたまふことども(如何にも情が深そうに申し立てなさることの数々も)、あむめり(あるようです)。

立ちとどまりたまはむも(このまま此処でお泊まりなさろうというのも)、所のさまよりはじめ(貧相な邸の様子からして)、まばゆき御ありさまなれば(とてもまともに考えられない状態だったので)、つきづきしうのたまひすぐして(あれこれと言い逃れなさって)、出でたまひなむとす(お帰りなさろうとします)。

*引き植ゑしならねど(何も特に自分が植えたものでは無いが)、松の木高くなりにける年月のほどもあはれに(松の木がだいぶ高く育ったほどの流浪の年月の長さを思えば)、夢のやうなる御身のありさまも思し続けらる(光君は夢のように過ぎた御自身の浮き沈みまで思い続けなされたのです)。　*「引き植ゑし」については、注に＜「引き植ゑし人はうべこそ老いにけれ松の木高くなりにけるかな」（後撰集雑一、一一〇七、凡河内躬恒）を踏まえる。＞とある。「うべ」は頷きで＜同意・納得＞だから、その強調の「うべこそ」は＜どおりで！＞くらいか。

「藤波のうち過ぎがたく見えつるは、松こそ宿のしるしなりけれ　(和歌 15-5)

「波打つ藤より松こそが、待つしるしかと過ぎがたし　(意訳 15-5)

*「藤波」は＜藤の花房が、風にゆられてうねりなびくさまを波に見立てていう語。＞と古語辞典にある。そのままだが、大きな藤棚はなかなか圧巻ではある。この歌は、その＜藤波の美しさに引き止められたかと思ったら、後ろの松こそが(待つ)人在りの標だったんだね＞と、二番煎じの言葉遊びを繰り返している。「松」だから「過ぎがたく(杉では無く)見えつる」も踏襲している。いや、良い景色は何度見ても良い。多分、唯一の救いだろうし。

数ふれば(数えてみれば)、こよなう積もりぬらむかし(ずいぶん時間も積もってしまったようだ)。都に*変はりにけることの多かりけるも(都に災害などが多かったのも)、さまざまあはれになむ(それぞれ痛ましいことだった)。　*都に悪天候は須磨の嵐と同時期に頻発して、それで朱雀帝が弱気になって光君の復帰を宣旨したと既述されている。また、昨年八月の野分で宮邸も壊滅的な被害を受けたことは本巻でも語られていた。

今、のどかにぞ(近い内にゆっくりと、)*鄙の別れに(ひなのわかれに、田舎に下った時の)衰へし世の物語も(情けなかった暮らしぶりも)聞こえ尽くすべき(残らず御話し申しましょう)。
*注に＜「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たき漁りせむとは」（古今集雑下、九六一、小野篁）。＞と参照出典が示されている。早速、「ミロール倶楽部」の古今和歌集のページでこの歌を見ると、「おきの国に流されて侍りける時によめる」と題字されてあり、＜小野篁（たかむら）が隠岐に流されたのは 838 年十二月。840 年に召還されている。 802 年生れであるので、当時の年齢は三十代後半である。＞と解説されていた。「おもひきや(思っても見なか

った)ひなのわかれにおとろへて(都落ちして力なく)あまのなはたき(網を手繰って)いさりせむとは(漁をするとは)」という歌が面白いほどに、小野篁は地位が高かった。何しろ参議の家柄である。

年経たまへらむ(年を越しなさるにも)春秋の暮らしがたさなども(季節に応じた衣食住を整える負担があって)、誰にかは愁へたまはむと(それを何方にかは訴えなさったか、いやなさるまいと)、うらもなくおぼゆるも(浮気を疑いはしませんが)、かつは(それも)、あやしうなむ(どうでしょうかね)」など聞こえたまへば(などと光君が姫に申し上げなさると)、

「年を経て待つしるしなきわが宿を、花のたよりに過ぎぬばかりか」(和歌 15-6)

「他には誰も居ないのに、花見ばかりの御越しとは」(意訳 15-6)

*この姫の返歌は光君の贈歌に在った遊び言葉を丸々返した、技巧上は良く出来た歌に見える。ただ、「年を経て待つしるしなき」は＜長年の放置で松が標にならない＞という意味になってしまうので、謙遜の気持ちは分かるものの、実際は＜松が宿の標になって＞光君の訪問を得たのだから、結果としてはウソになってしまう。しかし、それがウソになってしまうのを承知の上で「花のたよりに過ぎぬばかりか」と光君を引き止める姿勢を見せたことの方が、歌としては意味がある、のだろうと思う。姫は初めて、理屈と感性の歌から、理性と感情の歌へと一皮剥けた。理屈を知らなかったり分からないのは頂けないが、承知の上で曲げるのもウソをつくのも大人の器量で、そこで初めて自分の言葉で気持ちを表せる、とは理屈に酔いすぎた言い方だろうか。マ、意訳の方はとても遊び言葉を織り込めないので、姫の心意気だけを買った、ということで。

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、「昔よりはねびまさりたまへるにや(昔よりはだいぶ大人になられたか)」と思さる。

月入り方になりて(月が入り方になって入射角がだいぶ傾いてきたので)、西の妻戸の開きたるより、障はるべき渡殿だつ屋もなく(光を遮る筈の渡り廊下の屋根も無かったし)、軒のつまも残りなければ(正殿の軒先も壊れていたので)、いとはなやかにさし入りたれば(とても明るく月の光が居間に差し込んで)、

あたりあたり見ゆるに(其処此処が良く見えて)、昔に変はらぬ御しつらひのさまなど(昔と変わらない部屋の飾りつけなどが)、忍草にやつれたる*上の見るめよりは(忍草に覆われた屋根で廃れたような館の外観の見た目よりは)、みやびかに見ゆるを(華やかに見えたので)、　*此処での「うへ」は＜うわべ＞という意味だろうが、忍草の蔓が這ってやつれて見えるのは家の＜外観・外見＞である。

*昔物語に塔こぼちたる人もありけるを(昔話に密議の疑いを晴らす為にわざと壁を壊した人も居た事を)思しあはするに(光君は思い合わせなさって)、同じさまにて年古りにけるもあはれなり(それと同じ様に外見は悪くても室内は立派にして年を重ねてきたと考えてみるのも趣き深いものでした)。　*この「昔物語」が何を指すのかは定説が無いようで、注釈にある参照で最も文脈の妥当性が高いと思われるものを採用した。即ち、＜『集成』は「未詳。『奥入』に、昔、顔叔子という婦人が、夫の留守中、夫の疑いを避けるために、塔の壁を壊し、夜通し明りをつけていたという、貞淑な女の話をあげる」。＞という孫引きである。

ひたぶるにものづつみしたるけはひの（ひたすら姿を見せまいと為さる姫の態度が）、さすがにあてやかなるも（さすがに上品なのも）、心にくく思されて（悪く無いと光君は御思いになって）、さる方にて忘れじと（姫をそういうお人柄の人として忘れまいと）心苦しく思ひしを（気にされて居らしたが）、年ごろさまざまのもの思ひに（この数年の様々な懸案に）、ほれぼれしくて（ぼんやりしていて）隔てつるほど（疎遠になってしまっていた間に）、つらしと思はれつらむと（辛い思いを為さっていただろうと）、いとほしく思す（気の毒に御思いになります）。

かの花散里も（その後に出向いた花散里も）、あざやかに今めかしうなどは（派手な若やいだ振舞いなどをして）花やぎたまはぬ所にて（華やかに為さる方ではなかったので）、御目移しこよなからぬに（見比べると大差が無いことから）、咎多う隠れにけり（姫の欠点の多さが目立ちませんでした）。